

No. J2317 ヒンドゥー教美術における複合図像：古代・中世北インドにおける 「あらゆる姿を持つ」 ヴィシュヌ神像を中心に
京都大学 人文学連携研究者 大木 舞
本研究は、「あらゆる姿を持つ」（ヴィシュヴァルーパ）ヴィシュヌと呼ばれる特殊なヴィシュヌの図像について、北インドで古代・中世に制作された彫刻作品を調査し、美術・考古資料と文献資料を併用して考察を行うものである。 2023 年度の調査研究では、主に作例の大部分が残される北インドでの調査を実施し、現地での作例の熟覧調査を行うことで、(1) 現存作例のデータベースの充実化を図った。特に、画像資料のみでは判断しづらい細部の図像要素について確認する事が可能となったことにより、(2) 本作例群に含まれる特異な図像とその思想史的背景の考察を通じて想定していた、「あらゆる姿を持つ」ヴィシュヌ像が複数の化身を含む形で発展しつつ、従来のヴィシュヌ像や他の神格の図像を表現した他の作例から、様々な図像の要素を借用して形成された複合的な図像だという代表者の仮説を検証する事が出来た。具体的には、古代と中世前期のヒンドゥー教寺院・遺跡と博物館を中心に、次の地域で調査を行った。ウッタルプラデーシュ州のマトゥラー、ラクナウ、マディヤプラデーシュ州のカジュラーホー、ティグワン、ボーパール、ヴィディシャー、エーラン、ウダイギリ、サーンチー、グジャラート州のヴァドーダラー、シャマラージー、アーメダバード、ニューデリー。インド調査の途中で、2024 年 1 月 29 日にアーメダバード大学にて、サンスクリットの文献資料において言及されるヴィシュヌの「ヴィシュヴァルーパ」と現存作例に関する研究発表を行った。 今回の調査結果をもとに、これまでの本研究成果と併せて分析を行ったところ、従来「あらゆる姿を持つ」ヴィシュヌと称されて来た古代・中世の図像は、二つの類型に大別される事が判明した。これらの新たな成果は、今後国内外の学術誌等への投稿を行い、順次発表していく予定である。